

最終章

コノ道ヲ二人デ

【藤田／明治エンド】

見上げれば、夜空には赤い満月。

妖しいその光が、闇夜の中に佇む鹿鳴館をぼんやりと浮き上がらせている。豪華な門の前に立つ私を、バツスルドレスに身を包んだ淑女たちが追い越していく。

(……やっぱり、ドレスじゃなきゃ駄目だよね)

ちゃんとしたドレスだって持つてるのに、なんで制服なんか着て来ちゃったんだろう。思いきり浮いているのは百も承知だけど、いまさら着替えに帰るわけにもいかなくて。

(だって私は、チャーリーさんに会いに日比谷公園に行かなきゃいけないんだもの)

でも今夜開かれる鹿鳴館のパーティーには、八雲さんがいる。

(少しだけ。ほんの少しだけ……)

自分にそう言い聞かせながら、私は鹿鳴館のダンスホールを目指して庭園を歩いて行く。つかの間だけ、最後に夢を見るために。

「おい、今夜はマジックショーがあるらしいぞ」

「ほう、松旭斎天一か。最近よく聞く奇術師だな」

ダンスホールに入ると、一気に喧噪に包まれた。人に酔いそうになりながらふらふらと歩いていると、

「やあ、芽衣ちゃん」

「っ！」

背後から私の肩を叩いたのは、チャーリーさんだった。

「はは、驚かせてしまったようで悪かったね」

「ほ、ほんとにびっくりした」

まさか、こんなところで会えると思わなかった。てっきりチャーリーさんは日比谷公園にいて思っていたから。

「で、誰を探していたのかな？」

「え？」

「僕は君と、満月の夜に日比谷公園で待ち合わせしていたはずだ。でもおかしなことに君は今、僕との約束とは違う場所にいるようだからね」

（あ……）

「もしかしたら君は、誰か別の人と約束でもしていたのかな？　と思ったんだよ」

（違う、そうじゃないの。チャーリーさん）

でもなにを言っても言いわけのようになってしまう気がして、私は押し黙った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？」

なおも彼は、その話題で食い下がってくる。

「さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？ 君にとってその人は、現代での生活よりも大切なものなのかな？」

「それは……。よくわからない」

実はまだ迷ってる。

現代に帰らなきゃ……と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……へえ？ あんなに帰りたいたっていったのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

(でも、どうして……帰らなきゃいけないと思うんだろ？)

家族や友達が待っているから？

生まれ育った世界だから？

すべてを捨てるのは無責任だから――？

(じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの？)

私がいなくなったら、あの人はどう思うだろう。

私がないこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。

まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

(――そんなことさせたくない)

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた？」

私はうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、きつとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っているはずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いいや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしまえば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないたどえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。

現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のことを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

——赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

（チャーリーさん）

私は何度も呼びかけた。

（教えて。あなたは誰なの？）

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」
ぱちんと、大きく指を鳴らした。

「——おい」

(えっ?)

まばたきをした瞬間、世界はがらりと景色を変える。闇夜に白く浮き上がる鹿鳴館。バツスルドレスや燕尾服に身を包んだ紳士淑女たち。ガス灯が煌々と輝くその真上には、わずかに欠けた朱色の月が私たちを見下ろしていた。

「おい……芽衣。聞いているのか」

「は、はい」

めったに下の名前など呼ばれたことがないから、つい返事が裏返ってしまった。

「もう気が済んだのか?」

「なにがですか?」

「なにが、ではない。おまえが鹿鳴館の夜会に出たいと言ったのだろう。これでもう気が済んだのかと聞いている」

*

「え……」

なにかがおかしい。

藤田さんの中では、どうやら私は鹿鳴館の夜会に参加したことになっているようだ。たしかにダンスホールを覗いてはみたけど、ただそれだけで参加したというほどじゃない。すぐにチャーリーさんに遭遇して、それから――。

(それから?)

気がついたら、ここにいた。そして満月が浮かんでいるはずの空には今、いびつに欠けた月が夜を照らしている。

「藤田さん、私……」

「なにをしょげた顔をしている。鹿鳴館で肉料理でも食べ損ねたか」

藤田さんは大真面目な顔で聞いてきた。

「もう諦めろ。だいたいおまえは食生活が偏りすぎている。肉もいいが野菜や魚も食べと前から……」

(そうじゃないよ、藤田さん)

私は満月の夜にチャーリーさんと会って、現代に帰るつもりだった。でもなぜか満月の夜を通り過ぎ、私は藤田さんと一緒にいる。

『君にだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね』

(チャーリーさん、どうして?)

こんな大がかりなマジックを企てた、その理由を知りたかった。けれどその張本人は、もうここにはいない。私の問いに答えてくれる人は、すでにどこかに消えてしまった。

『幸せになるんだよ、芽衣ちゃん』

……その言葉だけを最後に残して。

「そんなにしよげるな」

私が肉料理を食べ損ねてへこんでいると思ったのか、藤田さんはため息混じりに言った。

「……あいにく肉の用意はないが、腹が減っているならなにか食わせてやる。来い」

「え、あ、あのっ」

藤田さんは私の手首を掴み、鹿鳴館に背を向けて歩き出した。

*

鹿鳴館を出て、やがて帝國ホテルの前を通り過ぎようとした時

「おや？」

タイミングよくエントランスから出てきた八雲さんと鉢合わせた。

「これはこれは、落ち武者の亡霊かと思ったら藤田サンではありませんか！ 見回りご苦労さまで……」

そこで私と視線が合い、八雲さんは目をしばたたかせながら眼鏡のフレームを指で持ち上げる。

「おやおやおや、おかしいですね。眼鏡の調子が悪いのでしょうか？ 藤田サンの隣りに、私の大切なレデイがいるような錯覚が……」

「錯覚ではない」

きっぱり、はっきりと藤田さんは言い放った。

「それと一応言っておくが、この娘は今夜は帰さん」

「はい？」

(は……?)

幻聴か空耳か、そのどちらかだと思った。私と八雲さんは同じ表情のまま、堂々と腕を組んで立つ藤田さんを見上げる。

「法的効力はないが、おまえはこの娘の保護者代わりだからな。礼儀上、一応の了承は取っておく」

「ふふっ、ふふふっ……あまり笑えないアメリカン・ジョークですね藤田サン！」

笑えないと言いつつ大笑いしながら、八雲さんは早口でまくしたてた。

「仮にジョークでなかったとしたら……、ええ、それはズバリただの犯罪予告です！ まがりなりにもポリスマンである貴方が、こんな若い娘サンに手を出して許されるとお思いですかっ？ そんな乱れた官人が、街の秩序を守れるとはとても……」

「無論、責任は取る。ならば問題はないはずだ」

「藤田さん……?」

この人は、いったいなにを言ってるんだろう。いつもの藤田さんらしからぬ発言の数々が、やたらと胸の鼓動を響かせる。手首の拘束がゆるんだかと思うと、彼はあらためて私の手を握りしめてきた。

「行くぞ」

「え！」

「ま、待ってください藤田サン！ ……誰かー！ おまわりさーん！ この人さらいを捕まえてくださいーっ！」

八雲さんの制止をもともせず、藤田さんは私を人力車に乗せ、自宅へと走らせた。人力車に乗る前も降りたあとも、手と手はつながれたままで。

*

（いったいどうしちゃったの、藤田さん）

いつだったか八雲さんが、『藤田サンが狐に取り憑かれた』などと言い出したことを思い出した。

あの時は『またまた八雲さんってば』としか思わなかったけど。

（まさか本当に、取り憑かれちゃったんじゃないよね……？）

などと本気で思案してしまうほど、今夜の藤田さんは変だ。現に今も、私の手は強く握られたまま。あまりの恥ずかしさに顔を上げることができない。

「……昔の話だが」

「？」

縁側に腰をかけ、藤田さんは夜空を見上げながら口を開いた。

「所属していた隊に、豊玉との俳号を持つ男がいた」

「はいごう？」

「俳句を作る時に使う雅号のことだ。本名ではない」

「……ああ」

いわゆる俳句のペンネームのことだ。いきなりなんの話をしだすのかと思った。

「所詮、素人の手習いで、褒められた句ではなかったがな。隊士たちも奴の俳句集を盗み見では腹を抱えて笑っていた」

「……藤田さんもですか？」

「腹を抱えはしない。笑うには笑ったが」

（うわ。けっこう意地悪だ）

でも藤田さんが笑っている姿を想像するのは、ちょっとだけ楽しい。笑ってる姿なんてあんまり見たことがないから、本当にただの想像になってしまっただけ。

「それで、どういう俳句だったんですか？」

私は俳句のことなんてよくわからないけど、藤田さんが笑ってしまうぐらいの内容には興味がある。すると藤田さんは少し考えてから、

「……知れば迷い、知らねば迷わぬ、恋の道」

（恋の道、って）

俳句そのものよりも、そういう単語が藤田さんの口から出ると妙に違和感を覚える。

「うまいか下手かはわからないですけど、かわいいですね」

「かわいい……？」

変な顔をされてしまった。

「だって恋の句なんてかわいいじゃないですか。男の人が作ったんですよね？」

「そうだ」

藤田さんはうつむき、わずかに肩を揺らした。

「しかし、かわいいなどと言われるとはな。……奴も今頃、草葉の陰で齒噛みしていることだろう」

「藤田さん？」

（あれ？ 笑ってる？）

それを確かめたくて顔を覗き込もうとすると、

「わ……………」

ぐいっと手を引かれ、私は藤田さんの胸に倒れかかった。硬い胸板の感触を確かめとたん、そのまま抱き寄せられてしまう。

「…………ふん。隙ありだな」

囁きがするりと身体の中に流れ込み、心臓が早鐘を打った。

「あの頃は笑いの種でしかなかったが、今にして思えばそう悪い句ではないかもしれん」
夜風が、庭の草木をささやかに騒がせる。風が乱した私の髪を、藤田さんが優しい手つきで直してくれた。

「知れば迷う。…………迷わざるを得ないと、今はわかるからな」

「……………」

この人の手は、たまにどうしようもなく優しくなる。誰かを傷つけ、誰かを殺めるために刀を振るう手も、今の私にはただただ優しく愛おしいものでしかない。冷血なはずの手が、多くの怒りや憎しみを重ねてきたこの手が、私にとってはこんなにも温かい。

「もう…………そんな目で月を見上げるな」

私を月から隠すようにして、その腕が強く身体を包んだ。

「おまえが懐かしむものの代わりに、俺はなれん。だがおまえを奪おうとするものとな

ら、俺は戦える」

「……藤田さん」

「すべて思い出しても、ここを選べ」

耳元で囁いたあと、誓いを立てるような口づけが頬に降りた。

「俺がおまえを守り……、愛してやる」

「……っ……」

その口づけは、やがて私の唇へと落とされていく。触れた部分が熱くて、全身が溶けてしまふかと思った。しっかり抱きしめていてもらわないと崩れ落ちてしまふ。そんな焦りとともに、私もまた藤田さんにしがみついた。

待ちわびた満月の夜を越え、私はこの人とともにいる。いつか記憶を取り戻し、思い出の重さに押しつぶされそうになつたとしても。

——もう現代には帰れないし、帰らない。

この時代で恋を知り、迷いながら、突き放されても手放せなかつた思いだから。

「……ここにいろ。いいな」

ぞくりとするような低い声も、今は恐ろしいとは感じない。ただ私の耳を優しく甘やかす。

「ここがおまえの居場所だ。……もう離さん」

お願いだから、そうしてほしい。一度突き放され、胸が引き裂かれるように悲しかったあんな思いは、もう二度としたくない。

「なぜそんなに震えている？ 俺が怖いのか」

「……怖くありません。もう慣れました」

「ほう？」

顎に指がかかる。軽く顔を上げると、藤田さんは大きな手で私の頬を撫でた。

「では、もっと慣れろ」

「っ……」

再び、唇と唇が触れ合う。どれだけ夜風に吹かれても、肌がすぐに熱を持つせいで寒さは感じなかった。

「慣れてもらわねば困る。……俺はもう、おまえに触れることをためらわんからな」

抱きしめられて拘束される喜びが心を満たす。現代への後ろめたさや心残りの輪郭が、曖昧にぼやけていく。

（私も、もうためらわない）

あの月が再び満ちる日が来ても。

「……どこにも、帰さないでくださいね」

「最初から帰すつもりはない。もう2度と、おまえを手放したりなど……するものか」
絡められた指と指。重なる体温の心地よさにたゆたいながら、私は瞳を閉じる。

——思い出にさよならを告げる、たった1粒の涙を流して。

*

「おまたせしました、八雲さん」

私はそう言いながら、淹れ立ての緑茶を八雲さんのそばに置く。

八雲さんは縁側に座って、のんびりと庭を眺めていた。私は八雲さんの隣に座り、同じように庭に目を向ける。

「ああ、どうぞおかまいなく。いやあ、たまたまいいお茶が手に入ったので寄ってみただけなのですよ。貴女の顔だけ見て帰るはずだったのですが、凶々しくお茶までご馳走になっちゃって、かえってすみませんでした」

八雲さんはお茶に手を伸ばしながら私に向かって優しく微笑んだ。

「いえ、私も久々に八雲さんにお会いできて嬉しいです」

「ふふ……ありがとうございます。私も貴女に会って、こうしてお話できてよかったで

す。新婚のようなご家庭にお邪魔するのもどうかとは思ったのですが……。もし貴女が泣かされでもしていたらと思うといてもたってもいられなくて」

「八雲さん……」

「ですが、杞憂もいいところでしたね。今の貴女は、実に幸せそうです。……認めるのは少しばかり悔しいですが」

そうやって八雲さんは、ウインクしてみせる。その姿がさまになっていて、さすが外国の人だなあと感心していると。

「ああ、ところでご主人は何時頃お戻りの予定なんです？」

「ちよつと帰りが遅れているみたいです。もう少ししたら戻ると思うんですが……」

「いえいえ、貴女が謝ることはありませんよ。藤田さんには、特に用事はございませんから」

「はい？」

「ふふっ………なんでしたら、未曾有の重大事件にでも巻き込まれてしばらく帰ってこなければいいとすら思っています。私をご主人の代わりに、この家の平和を守って差し上げたい……」

クツクツと黒い笑顔を浮かべる八雲さんの喉もとに、サーベルの切っ先があてられた

のはその時だった。

「……………」

「……首か手か足、どれがいい。斬られる部位を選ばせてやる」

藤田さんは怒気を含んだ口調と、冷ややかな視線を八雲さんに浴びせる。

(い、いつの間に……)

「おや、藤田サン！ いきなりなんなんです、物騒な。帰ってきたらまずは『ただいま』
と言うべきでしょう？」

「ふざけるな。間男のような真似をして、今、首と胴がつながっているだけでもありがたい
と思え」

「間男！ ……さすがおサムライさんは言葉のチョイスが古いですね。ここは愛人と書
いて『ラ・マン』と呼んでいただきたいところで……あいたっ！」

「帰れっ」

藤田さんは、八雲さんに向けていたサーベルを勢いよく玄関のほうへ向ける。

「今、石を投げましたかっ？ 飛び道具とは卑怯ですよ、藤田サン！ 剣豪の名折れで
すっ」

「では斬るっ。それなら文句はないな？」

「……それではみなさんごきげんようっ」

「あっ、八雲さ……っ」

八雲さんはかたわらの荷物を慌てて掴むと、庭の垣根を跳び越えて、走り去っていった。

(な、なんだったんだろう……)

風のように現れ、風のように去っていった。八雲さんはあいかわらずだ。

「……おい。なぜあの男を家に入れた」

すると不機嫌そうな声が、私の頭上から振ってくる。

「えーっと、気づいたら縁側にいたので……」

そう。八雲さんは玄関から『お邪魔します』とやって来たわけではない。気づいたら縁側にいて、まるで我が家のようにくつろいでいたのだった。

「……たしかにうちの庭は、垣根をまたげば簡単に入れるが……」

八雲さんならやりかねないとも思ったのか、藤田さんは大きくため息をついた。

「……それにしても、おまえは危機感がなさすぎる。いや、それ以前に、やはり女が1人で留守を預かるというのはよくない。大至急警備の人間を2、3人雇わねば……」

「いえ、ここを訪れるのは八雲さんくらいですから、大丈夫ですよ」

「なにを言っている、あの男が一番危険だろうっ」

(うーん……)

八雲さんが不埒な真似をするとは思えない。だけど、藤田さんが私のことを心配してくれるのは純粹に嬉しかった。だから、顔がほころぶのを止められない。そんな私を見た藤田さんの顔に、わずかなためらいの表情が浮かぶ。

「俺が心配性なのではない。そうではなく、おまえが……」

そう言うと同時に、藤田さんは私の腕を強い力で引き寄せると、そのまま腕の中に抱きしめた。

「あっ……」

私は藤田さんの腕の中に、すっぽりと包まれていた。

「……おまえが、俺に心配をかけさせるんだ」

耳もとに口を寄せて、藤田さんは低い声で囁く。

「……まったく。おまえと所帯を持ってからというもの、気苦労が明らかに倍になったぞ。家族もない俺は、今まで自分の心配だけしていればよかったからな」

藤田さんは眉を寄せ、自嘲気味に笑う。

「それがなんの因果か……なぜよりによって、心配事のかたまりみたいな女と一緒にな

ってしまったのか。……わからん」

「……藤田さん、私と一緒にになって……後悔してますか？」

顔を上げると、藤田さんは少しだけむっとした顔になった。

「後悔、だど？ ……俺はこれまで、己の選択を1度たりとて見誤ったことなどない。後悔など、誰がしてやるものか」

そうやって、藤田さんは私を抱く腕に力をこめる。

「おまえが俺に、どれだけ心配をかけたとしても俺がおまえを守ると決めた事実は変わらない。おまえが何度危険な目に遭おうとも、……俺が何度でも守ってやる」

「……………」

おでこに触れる、優しい唇。そのあたたかさに、心がふんわりと柔らかくなった。

「……だからおまえも、後悔するなよ。いや、後悔などさせないくらい……愛してやる」

） F I N （